

おおさか

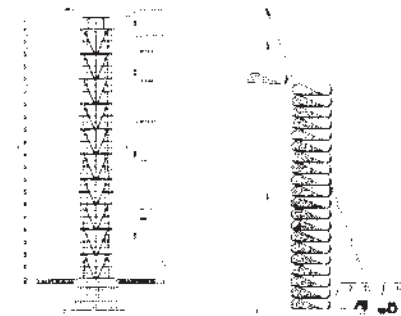
## KEY わーど

第  
59  
回未来に向けたパブリックアートの今  
やっぱり落城より築城でしよう

道頓堀開削にちなんだ前号。今回は大坂夏の陣400年記念である。「大坂の陣400年天下一祭」のイベントが開催されているが、落城を自虐的に祝うことに大阪人として疑問を感じる私は、昭和58(1983)年の「大阪築城400年まつり」をなつかしく思い出す。

あのときは大阪城で博覧会が開催され、二ヶ月間に約532万人が入場した。記念事業も実施され、前年の昭和57年に地元ライオンズクラブによってJR新大阪駅前に築城400年のモニュメント《タイムストーンズ400》が設置される。

大坂城石垣のために切り出されながらも、用いられなかった「残念石」を型どりし、それを原型にポリエステル樹脂とガラス繊維で成型したレプリカを20個積み上げた作品で、高さは約16.5m。銘文には、「大阪城築城400年を迎え、大阪城の石垣の石をモチーフにした巨石を、未来に向かって積み上げ、現代に生きる、ときの想いの中に21世紀へ限りなく発展する国際都市、大大阪への自由、活力、創造のシンボルとして、真心をこめて建立したものです」と未来への希望を謳う。



モニュメントの設計図。クレーンで最後の石をつり上げる計画も描かれている。

作者の今井祝雄<sup>いまい のりお</sup>さんは、大阪から世界に発信した前衛美術団体「具体美術協会」に参加し、70年万博にも石のモニュメントを制作するなど、パブリックアートで活躍されているアーティストである。構想では石一つが20年を象徴して20個で400年、一個100年とみれば20個で20世紀をあらわす。そして、ミレニアムで21世紀を迎え、もう一つ積んで21個で“完成”する計画だった。

しかし資金などの問題で、最後の一個は積み上げられず、現在も地表に置かれて出番を待っている。経緯は今井さんの『未完のモニュメント—まぢのアートは誰のもの?』(樹花舎、2004年)に詳しい。

大坂城の「残念石」だが、本当をいえば豊臣ではなく、徳川再建の大坂城のため集められた石で



除幕式の様子



除幕後、古代衣装の女性が祝舞を舞い、モニュメントに精気が満ちる。

ある。大阪の各所に残され、城内には、「残念石」を集めた刻印石広場があるし、天守前の「残念石」は、昭和56(1981)年、石の切り出し先で、大坂城残石記念公園もある小豆島の青年会議所創立10周年記念事業として、大阪青年会議所とともに運んだものである。《タイムストーンズ400》の原型は、このイベントで小豆島の黒田長政の石切丁場から「修羅」(当時の木製運搬ソリ)で運ばれた。

ほかにも、落城より300年後の大正4(1915)年に建立された日本橋の「道頓・道卜紀功碑」<sup>どうとん・どうぼくきこうひ</sup>と安治川の「河村瑞賢紀功碑」は、どちらも川から引き上げられて碑に転用されたもの。淀川河川公園にある「毛馬の残念石」は、大坂城に転用すべく運んできた伏見城の石垣が淀川に落ちたもの。此花区の伝法港には、正蓮寺川の工事で発見された石がベンチとして置かれ、芦屋市立美術博物館にも「残念石」を用いたアート作品がある。

パブリックアートも「つくりっ放し、置きっ放しとならず、大切に育て上げていかなければ」と訴える今井さんだが、新大阪駅前のモニュメントは依然として“未完”であり、「こんなささやかな事業すら実現できない大阪の文化度および民度の向上を願うモニュメントとして立ちつづけるほかない」とも嘆いておられる。イベントを次々企画するのもいいが、築城400年の未完成プロジェクトを完成させるのも大阪人のつとめだろう。

そこでふと思う。「残念石」はいつまで“残念”なのか。ゴボゴボブツブツ…石の上にも三年、いや川の底にも四百年。石のほよきが聞こえてきそうだ。街そのものが「残念石」にならないようがんばりましょう。

## 筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念 佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像—(創元社)など。